

## スペシャルオリンピックス会員のボランティア活動に対する意識について ～ 参与形態によるボランティア活動と組織の機能の評価～

○ 鈴木 英悟（東海大学大学院） 大堀 孝雄（東海大学） 西野 仁（東海大学）

キーワード：スペシャルオリンピックス、ボランティア、知的障害者スポーツ

### I 研究目的

近年わが国におけるボランティア活動への関心や認知は高まっており、多くの国民が機会と条件が満たされるならば、ボランティア活動への参加を積極的に求めるようになってきている。<sup>注1) 注2)</sup> スペシャルオリンピックス(以下SOとする)日本は、1994年11月にSO熊本が設立され1997年12月現在11地区の設立となったが、この間SO日本としての総括は一度もされなかった。<sup>注3)</sup>

そこで、本研究は、SO会員のボランティア活動に対する評価とSO地区・SO日本の機能に対する評価を参与形態別に検討することを目的とする。

### II SO日本の概要

#### ① SOの目的と活動

知的ハンディを持つ人たちに、彼らの自立と社会参加の促進を目指した日常活動であるスポーツトレーニングプログラムとその成果の発表の場である競技会を提供することを目的としている。活動においてはボウリング、陸上競技、バスケットボール、水泳などのスポーツトレーニングプログラムを週1回実施している。

#### ② SO日本の歴史

1993年3月にSO熊本が設立。1994年11月にSO日本が設立され、国際本部（ワシントンDC）に加盟した。1997年12月現在11地区の組織が活動している。1998年（8月現在）に4地区（鹿児島、広島、長野、北海道）で設立準備委員会が発足し、長野を除く3地区が設立された。1997年3月現在の会員構成：一般ボランティア（2,974人）、学生ボランティア（526人）、団体ボランティア（259人）、アスリート（男591人、女260人、計851人）<sup>注4)</sup>

#### ③ 各地区の設立年

表1) 地区別設立年

地区	設立年	地区	設立年	地区	設立年	地区	設立年
①熊本	1993, 3	④佐賀	1995, 4	⑦大分	1995, 12	⑩京都	1996, 11
②東京	1994, 10	⑤神奈川	1995, 4	⑧福岡	1996, 5	⑪徳島	1997, 6
③大阪	1995, 3	⑥宮城	1995, 11	⑨石川	1996, 7		

### Ⅲ 研究方法

1. 調査対象 SO11 地区のボランティア名簿から無作為抽出したボランティア会員（法人、団体を除く）980 名。
2. 調査方法 郵送法による無記名のアンケート調査。
3. 回収率 980 枚郵送し、回収数は 384 枚、宛名不明 21 枚。  
有効回収率： 38.6%

表2) 地区別会員数と調査用紙の配布・回収数

	熊本	東京	大阪	佐賀	神奈川	宮城	大分	福岡	石川	京都	徳島	合計
ボラ会員数	542	266	204	69	569	818	306	319	55	26	82	3256
配布数	175	93	56	18	159	266	74	92	20	6	21	980
配布率(%)	30.1	30.5	27.5	26.0	28.0	32.5	24.1	28.8	36.3	23.0	25.6	30.0
有効回収数	75	39	11	11	49	104	24	37	10	5	13	378
回収率(%)	42.8	41.1	19.6	61.1	30.8	40.3	32.4	40.2	50.0	83.3	61.9	39.2

4. 調査期間 1998年6月13日～1998年7月6日

#### 5. 調査内容の構成

質問項目は、SO 日本の助言および SO 会員延べ 25 名による予備調査、「全国ボランティア活動者実態調査報告書」を参考に作成した。

属性、会員加入の動機、今後の SO のボランティア活動への態度、ボランティア活動の評価、「SO 地区」と「SO 日本」の機能の評価、SO 運動の認識、等から成る。

#### 6. 集計方法

- (1) 単純集計の結果を、参与形態別にクロス集計をし、表を作成した。
- (2) 参与形態：活動頻度（活動時間量—予測）を基準として役務別に 5 つに分類した。2 つ以上の役務を担当している会員は活動頻度の多い役務に集約して集計をした。

### Ⅳ 属性

表3) サンプルの属性

項目	N (%)	項目	N (%)	項目	N (%)
<b>性別</b>		<b>入会年</b>		<b>職業</b>	
男性	132 (34.9)	1993	24 (6.4)	自営業	44 (11.6)
女性	246 (65.1)	1994	31 (8.2)	自由業	23 (6.1)
		1995	74 (19.6)	会社員・公務員・団体職員	123 (32.5)
<b>年齢</b>		1996	101 (26.7)	パート・アルバイト	37 (9.8)
10～19 歳	25 (6.6)	1997	124 (32.8)	中学・高校生	16 (4.2)
20～29 歳	45 (11.9)	1998	24 (6.3)	専門・短大・大学生	28 (7.4)
30～39 歳	40 (10.6)	<b>参与形態</b>		無職	107 (28.3)
40～49 歳	94 (24.9)	会費会員	138 (37.1)		
50～59 歳	118 (31.2)	役員・理事	30 (8.1)		
60～69 歳	46 (12.2)	コーチ責任者	23 (6.1)		
70 歳以上	10 (2.6)	コーチ補助	92 (24.7)		
		サポーター	89 (23.9)		

## V 結果

### 1 参与形態によるボランティア活動の評価

表4は、これまでのSOボランティア活動を通して「良かった」と実感した項目を集計し、結果を示した。

#### 1) 「良かった」評価

- ① 全体の上位3項目は、1位「新たな友人づくり(56.4%)」、2位「障害者問題の視野拡大(46.1%)」、3位「SO運動に共感(43.9%)」であった。②「その他」の回答肢を除く下位項目で最下位は「アスリートとの信頼関係(16.8%)」、次いで少ない割合は「自分自身の役割達成(17.1%)」であった。

#### 2) 「困った」評価

- ① 全体の上位3項目は、1位「活動と仕事、家事、学業等の時間的調整が困難(47.4%)」、2位「活動に必要な情報伝達の不足(18.4%)」、3位「活動中の事故が心配(15.4%)」であった。②5つのグループに共通して1位は「活動と仕事、家事、学業等の時間的調整が困難」で、割合も4割強から6割弱であるが、最も高い数値を示したのはコーチ責任者の56.5%であった。

表4) 参与形態別ボランティア活動の評価(上位3項目)

項目 参与 形態	「良かった」経験			「困った」経験		
	項目	実数	%	項目	実数	%
(1) 会費 会員 N=138	SO運動が目指すものに共感した	61	46.2	活動と仕事・家事・学業等の時間的調整が難しい	63	46.7
	障害者問題に対する視野が広がった	58	43.0	その他	26	19.3
	新たな友人が出来た	44	32.6	活動中の事故が心配である	20	14.8
(2) 役員 ・ 理事 N=30	SO運動が目指すものに共感した	22	73.3	活動と仕事・家事・学業等の時間的調整が難しい	16	53.3
	新たな友人が出来た	23	76.7	SOの研修会などで使われている用品がわかりにくい	8	26.7
	アスリートが「変化・発達する」場面に会った	15	50.0	地区の役員の指導力・援助が不足	7	23.3
(3) コーチ 責任者 N=23	新たな友人が出来た	20	87.0	活動と仕事・家事・学業等の時間的調整が難しい	13	56.5
	アスリートが「変化・発達する」場面に会った	18	78.3	活動に必要な情報がきちんと伝達されない	9	39.1
	障害者問題に対する視野が広がった	17	73.9	地区の役員の指導力・援助が不足	7	30.4
(4) コーチ 補助 N=92	新たな友人が出来た	63	68.5	活動と仕事・家事・学業等の時間的調整が難しい	41	44.6
	アスリートとふれあうのが楽しい	58	63.0	アスリートと信頼関係を築くのが難しい	21	22.8
	活動自身が楽しかった	57	62.0	活動に必要な情報がきちんと伝達されない	20	21.7
(5) サポーター N=89	新たな友人が出来た	59	71.4	活動と仕事・家事・学業等の時間的調整が難しい	42	47.2
	活動自身が楽しかった	46	50.6	活動に必要な情報がきちんと伝達されない	24	27.0
	アスリートが「変化・発達する」場面に会った	33	37.1	活動上あれこれの事柄を話せる機会がない	11	12.4

※ %：各参与形態の人数に対する割合

## 2 参与形態による SO 地区と SO 日本の機能の評価

SO のボランティアの組織と活動を発展させていくうえで SO の機能として重要と考える項目を 3 つ以内で選ばせ、集計した結果の主な内容を示す。

### 1) SO 地区が力を注ぐべき事項

- ① 全体の上位 3 項目は、1 位「新しいボランティア会員加入の活動機会提供 (47.8%)」、2 位「コーチボランティアと支援ボランティアの意志疎通の円滑化 (36.0%)」、3 位「新しいアスリートの加入 (23.6%)」であった。
- ② 5 つのグループに共通する項目は、「新しいボランティア会員の加入のための活動機会の提供」で、コーチ責任者が 2 位 (47.8%) であるが、他の 4 つのグループは 1 位であった。

### 2) SO 日本が力を注ぐべき事項

- ① 全体の上位 3 項目は、1 位「SO 日本と SO 地区の情報交換の円滑化 (40.4%)」、2 位「SO 会員の研修機会の提供 (36.5%)」、3 位「SO 地区の組織的運営の効率化 (30.5%)」であった。
- ② 「SO 日本と SO 地区の情報交換の円滑化」を 1 位にあげたのは役員・理事 (60.0%)、コーチ責任者 (47.8%)、コーチ補助 (50.0%)、サポーター (36.8%) であり、会費会員は、2 位 (30.6%) であった。

## VI まとめ

### 1) ボランティア活動の評価

全体の結果と参与形態による結果に共通する項目と異なる項目があるのは、SO に対するかかわり方—活動内容と活動頻度の実体の差異によると推察された。

- 2) SO 地区・SO 日本の組織の機能の評価—SO 地区の課題としては、ボランティア会員とアスリート会員の拡大、ボランティア会員同士のコミュニケーションがあげられたが、実践的立場からの要望と考えられた。SO 日本では、SO 地区との情報交換不足が最大の課題としてあげられた。これは、SO 日本および SO 地区の歴史が浅いこと、組織力が弱いことから相互の組織的機能の未成熟によるものと、考えられた。

注 1) 「月刊世論調査」(1993) : 総理府広報室 p30 注 2) 「全国ボランティア活動者実態調査報告書」(1996) : 全国社会福祉協議会 注 3) SO 日本専務理事・菅 正康氏 (1998,5,25) 注 4) 「1998 年第 1 回・地区連絡協議会資料」 : スペシャルオリンピックス日本、(1998,3,29)